道場破りガールズ!!
負けたら子作りいたしますっ!
小説 大熊狸喜 挿絵 あいのせりん
立ち読み版

剣乃峰 七尾（つるぎ の みね ななお）

拳太郎の幼なじみの女の子。「日乃本一極流道場」の真向かいに建つ「剣乃峰剣術道場」の五女で、互いに道場間を行き来する仲で、拳太郎にご飯を作ってあげることも。

私、今宵…『道場破り』をしに、参りました…

珠柳 麗（たまやなぎ うらら）

長刀の名門「玉柳流」の家の女の子。過去に挑まれた道場破りの因縁を晴らすため、拳太郎のもとに道場破りにやってくる。

わたくし実はっ、道場破り、に参りましてです～！

愛崎 鏡華（あいさき きょうか）

弓道の名家「愛崎家」の跡取り娘で、訳あって拳太郎の道場へと道場破りに現れる。弓道家としての実力はもちろん、家事が得意な一面も。

日乃本 拳太郎（ひのもと けんたろう）

「破階級格闘　日乃本一極流道場」の道場主の息子。まだ免許皆伝には至っていないが、よく道場を留守にする父親の代わりに、実質二代目として道場を守る。

日乃本 豪拳（ひのもと ごうけん）

「破階級格闘　日乃本一極流道場」の当主。ふらっと修行の旅に出かけ、道場破りを繰り返す。

プロローグ　その①　月下の決着　007
プロローグ　その②　拳太郎と七尾　009
第一章　ＶＳ長刀少女　016
第二章　ＶＳ弓術少女　072
第三章　ＶＳ剣術少女　127
第四章　長刀少女ＶＳ弓術少女ＶＳ剣術少女　183
エピローグ　道場破りガールズ!!　253

頬を染めて、潤む瞳で、静かに強く答える麗。細くて柔らかい少女の身体を布団に寝かせると、拳太郎は部屋の明かりを消して、月明かりの中で初体験をした。

「麗さん……ちゅ……」

「んん……ちゅ……ぁふ…」

初めてのキスをしながら、名前を呼ぶ。少女の薄い唇は、出来たてのゼリーよりもプルプルで濡れていて、何度キスをしても、極上の美味。

「ど、どぅか…その……ちゅぷ……麗、と……ちゅ」

どうやら少女は、呼び捨てにして欲しいらしい。

「えっと……う、麗」

ちょっとドキドキしながら、しかし何となく誇らしい気持ち。

拳太郎に呼ばれると、麗は瞳を潤ませて、心底嬉しそうに返答をした。

「あぁ……はぃ……拳太郎様……♥」

頬を染めて瞼を閉じて、拳太郎の唇を素直に受け入れる黒髪少女。震える細い指はいつしか、少年の広い背中を恥ずかしそうに抱き締めていた。

弾むようなキスとタップリ重ねる口づけを繰り返し、少年の唇が頬へ、首筋へと滑って降りる。

繊細な肌に舌先で触れつつ、皮膚の薄い首筋をチュっと優しく吸ったら、柔らかくて熱

い少女の肢体が、ピクんっと反応。
「ひゃんっ――はあぁ…か、身体が…！」
初めての体験に緊張しつつも、性感で熱を上げてゆく。小さく震えながら少しずつ力が抜けて、白い肌が、羞恥と期待で上気していた。
薄く汗を纏った華奢な女体は、窓からの月明かりを受けて、キラキラと神秘的に、官能的に輝く。
鎖骨のラインを吸って胸に降りると、平均より小さな膨らみが脣に触れる。
少年に触れられると、あらためてサイズが気になるのか、あるいは恥ずかしいのか、目を閉じて真っ赤に染まった美顔を逸らした。
「け、拳太郎様…申し訳、ありません……私がもぅ少し…豊かなら……」
「何言ってんだよ、麗は綺麗じゃないか」
「…は……ぅ…嬉しぃ…です……！」
拳太郎の言葉に、麗は潤んだ眼差しを向ける。仰向けな麗の乳房は、最上のプリンみたいにプルプルと震えながら、丸い膨らみを綺麗に保っていた。
白い肌が、羞恥と鼓動に柔らかく振動していて、乱れ始めた吐息で上下している。先端の乳首は朱みを増して、少年の視線を受けて、キュ…と硬化を魅せていた。
初めて異性に晒される恥ずかしさに耐えながらも、控えめな自己主張をしている、健気(けなげ)

で可愛い美乳の姿だ。
ソっと唇で愛撫しつつ、乳輪の周りを舌先で撫で撫で。
――ちゅ、ちゅ……レロ、ちゅぷ…！
「んんっ――はあぁ……私の、胸を……」
掌で包み込んで、全体を撫でながら指先で柔脂肪を揉み上げる。掌の内側で先端媚突を優しく撫でて、乳房と乳首で別なる刺激を与える。
「け、拳んぁあぁっ――胸ぇっ――スリスリっ、感じてぇぁあぁぁっ！」
コンプレックスの箇所だからか、乳房も乳首も、羞恥で敏感だ。
柔らかい乳肌を揉み上げると、詰まったように吐息をこぼし、硬化した乳首を刺激すると、唇から官能が漏れる。細い肢体が切なげにしなり、逃れるように背筋が反れて、もっと愛撫を求めるように、胸が突き出された。
片方を掌で揉み愛撫しながら、もう片方を唇で含み愛撫。乳肌の周囲から舌で責めて、焦らされた媚突が震えると舌責め。
「はふっ――ぁはあぁぁっ――そんなにぃっ……はぁうぅ……むね、ばかりひいぃ……！」
麗の瞳は羞恥と性感の涙で潤み、肢体からは力が抜けて、脱力に震えている。
左右の責めを何度も入れ替えて乳房愛撫を繰り返し、麗の美乳が綺麗なんだと、麗自身に解らせる拳太郎。

「胸、弱いんだな…ちゅ。それに、綺麗で可愛いな、麗」
「っ――ぁはあぁ……拳太郎、さまぁ…♥」
少年の愛撫と言葉で、少女は心から、安堵と官能の吐息をこぼしていた。
女性の肌の柔らかさと言葉で、少女は心から、安堵と官能の吐息をこぼしていた。
そして石けんとも違う、清潔で優しい香り。
麗の肌と触れ合っているだけで、拳太郎のペニスはこれまでにないほどの、堅さと熱を体現していた。
早く結合したいのに、女の身体をもっと知りたい――。
相反する本能に急かされながらも、麗の肌を探求、堪能してゆく。
乳房から鳩尾（みぞおち）、縦長のおへソから下腹部へと舌舐めしてゆくと、目的の箇所が解るからだろう。黒髪少女の肌が、更にピクピクっと微細に震える。
「あぁ……け、拳太郎、さまっ――んあん…っ！」
ピタリと閉じられた処女割れ目の上端を愛撫したら、恥ずかしさに脚を閉じてしまう。
誰も知らない閉じ目を優しく吸いながら、細いけど脂の乗った腿を割ってゆく。
「ぁ……ど、どぅか……あぁ……」
恥ずかしいのに、拳太郎の腕には逆らえない。そんな両腿を難なく開くと、穢れを知らない麗の姫処が、拳太郎の視界に晒された。

初めて見た女性器は、とても綺麗だと素直に感じる。
「麗……とても綺麗だ…！」
「はひぃっ――は、恥ずかしぃ…です…っ！」
柔らかく閉じられた秘処は、産毛どころか毛穴すらなく、ツルツルでツヤツヤ。全体は朱く上気していて、少年の愛撫と視線を受けて、細い閉じ目には極薄い蜜を含んでいた。
拳太郎は男子の本能で、閉じられた女性器を優しく指で開く。
――ちゅく……。
「ひっ――わ、わたくし……み、みられて……っ！」
拳太郎の目の前で開かれる、麗の女性器。お互いに初めての経験で、心臓がトクトクと早鐘を打っている。
他の女性は知らないけど、麗の秘処は、きっと身体と同じく小さな作りだろう。
透明な蜜を纏った女性器は、性興奮と羞恥で充血している。
上端の肉芽は恥ずかしそうに、濡れた半身を晒し、震えていた。小さな花弁は極薄で形も整い、左右に開いて少年に全てを晒す。
柔らかいシワを魅せる粘膜の中心では、ポツんと膨れた小さな尿口。すぐ近くの粘膜下端で、ピクピクと小さな口を絞っているのは、今初めて人目に触れた、処女の膣孔。
すぐ下にはツルツルの会陰と、その下には小さな肛門。薄いカフェオレ色に息づく後孔

は、蜜を纏って、膣孔と一緒にクプっと収縮していた。
初めて割れ目の中まで見て、男子の本能が勝手に、全てを記憶。
目の前数センチという直近での女性器に、視線も身体もガンガンと熱を上げる。爽やかなヨーグルトみたいな、甘い酸性の香りが鼻腔を擽っていた。
（これが……ま〇こだ……）
綺麗で可愛くて、神秘的な感動。それが正直な感想だった。
「け、けん…たろぅ……さまあぁ…そんなに……はぅ…ご覧に、なっては…」
麗の吐息は、気絶寸前にまで掠れている。少年の視線を間近で受けて、羞恥が限界を迎えているのだ。
男子の本能か、震える肉芽を舌先で触れる。チュっと吸いつき、更に粘膜を舌愛撫。
膣孔に舌先を差し込んで、粘膜全体を優しく吸引する。性粘膜はプニプニと柔らかくて弱い弾力があって、熱くて甘酸っぱい不思議な感覚がした。
そして蜜を吸えば吸うほど、男性の身体に力が籠もってくる。
――レロ、ちゅっちゅっ……つぷ、ちゅぷちゅるぷ。
「はひっ――はっあっ――そんなっ――きたないとこふっ――だめですぅっ――けんたろふさまっ――ラメれすふぅぅっ――っ！」
処女性器を舌責めしたら、少女の背中が恥ずかしさと性感で、大きく反れる。肢体は上

気してシットリと恥汗を纏い、内腿は羞恥に震える。
腿を閉じたいらしいのに閉じられない、不思議な戸惑いを感じさせながらも、自分を征した少年に全てを見て欲しいという、女の本能に翻弄されている麗。
そんな戸惑いに、男子の狩猟本能が強く刺激される。
（もう、したい――っ！）
処女粘膜を舌愛撫していたら、少年の性欲求が限界を迎えた。再び美顔を見つめる位置まで身体を戻し、裸身で震える麗に覆い被さって、正常位の恰好になる。
女の本能と言うべきか、そんなタイミングで勃起を見てしまった麗。
「っ――ひやぁぁあっ――そ、そんなっ……ぉおきぃ…っ！」
まるで、小さなエモノを狙う怪物のようにでも感じたらしい。身を固くして、綺麗な声が裏返ってる。
拳太郎のペニスは、血を集めてガッチガチに硬化していた。ヘソに付きそうなほど反り返り、己の力と欲求を、麗に向かって見せつけている。
あらためて驚かれると、性衝動の間に、僅かな逡巡も湧く。
「あ……えっと…っ！」
でも、とにかくしたい――。
長刀少女は、自分を制した勝者の視線に、性欲求と躊躇いの交じった、複雑な感情を読

み取ってくれる。少年の意志を理解した黒髪少女は、潤む瞳で覚悟を決めると、目を閉じて弱々しく抱きついて、全てを委ねてきた。
「け、けんたろぅさま……どぅぞ…っ！」
初体験の怖さを噛みしめて身を捧げる、健気で愛らしい麗の両脚を、大きく限界まで開かせる。
初めての瞬間が来る事を覚悟して、更に身を密着させる少女。
熱い処女孔にペニスを充てると、拳太郎は少しだけ、腰を前進させる。
「ぁ……はふ……っ！」
初体験の少女は震えながら、どうしたらよいのか解らないようだ。
少しずつペニスを埋めてゆくと、ヌルヌルの粘膜が強く締めつける狭い肉孔に、微弱な抵抗感で押し返されそう。
更に数センチ進むと、キツい絞りの先端に届いたような感じ。処女膜に到達したのだ。
「はぁっ……はぁっ……はぁっ…！」
もうすぐ。という緊張と恐怖で、瞼を閉じる麗は激しく吐息を乱す。しかし肢体は、少年を信じて抱き締めたままだ。
（麗、緊張してる……）
性急である脳の片隅で、そう理解した拳太郎は、麗の緊張を少しでも解きつつ、初性交

に臨んでいた。
優しく髪を撫でながら、名前を呼んで見つめて、そっと口づけ。
「麗……ちゅ」
「けん……ちゅ」
麗が心も身体も安堵した瞬間、拳太郎は一気に腰を突き出し、ペニスを突入させた。
――っっぷつっっ！
「っ――っんん……っ！」
同時に、少女の肢体が一瞬だけ力み、そしてユルユルと脱力。処女を捧げた清純な秘処から、綺麗な鮮血が一筋流れた。
「はあぁぁっ……はああ…はぁぁ……けんたろう、さまぁ…♥」
麗は、幸せな痛みに耐える、複雑で美妖な愛らしい女の笑みを魅せていた。
（うららっ――可愛いっ！）
自分の下で、ペニスに耐える少女。そんな支配欲にも似た実感は、少年の性本能を強く刺激。拳太郎は麗の痛みが弱まった頃を見計らうと、すぐに抽送を開始した。
最初はゆっくり、しかしすぐに、強く、深く。
――つぷぷ…ちゅぷるぷ……ちゅぷぷ、つぷ、ちゅぷっ、つぷつぷぬりゅぷっ！」
「ぁあっ、はっ――ひああっ――けんたろぅ、さまあっ――あっあっあっ、ふあぁぁぁぁ

あぁぁんっ――っ！」

少年の突き込みに翻弄される、少女の肢体。痛みは数瞬で遠退いて、深い痺れで全身が覆われてゆくようだ。

強く一突きされる毎に性快感で子宮が責められ、腰が砕けて全身がペニス責めを躱けられる。ギリギリまで抜かれると、無意識と聖宮が切なくされて、もっと下さいとオネダリをしてしまう、麗の身体。

深く力強く突かれる度に、子宮から下腹部全体へと、男性器の圧迫感に内側から征服されていくのが、蕩ける声の愛らしい艶で解る。

聖宮から背筋を抜けて、脳の中心までもが、少年の存在感だけで、支配されてしまうようだった。

「けんたっ――ろふさまはぁぁっ――わたくひぃぃっ――はんっ、ぁぁあはぁぁっ――けんたろふさまにひっ――しきゅふっ――ひぃぃっ――しきゅふからっ――そめられへぇぇぇぇぇっ――っ！」

勝利者の所有物へと染められてゆく喜びが、麗の唇から蕩けて溢れる。

腰打つ拳太郎も、初めて体験する膣壁の感触に意識を包まれながら、官能と感動を深く味わっていた。

麗の膣壁は、無数の襞を備えながら、少年のペニスに縋りついている。

限界まで腰を引くと離れたくないと吸いついてきて、根元まで突き込むと全体で喜び、フワリと受け止めて更にキツく抱擁してくれる。

抽送の度に新しい蜜を溢れさせて、甘酸っぱいフェロモンで更に男性を興奮させる。

女体の不思議な誘惑に肉体を呑まれてゆくと、ペニスは更に一段、熱と太さをグンっと増して、射精の本能が刺激された。

早く出したい！　この身体に出したい！

そんな無意識の欲求に、拳太郎の身体は素直に従う。全身が力を上げて、腰打つ早さも強さも増大。

――っつぷぷちゅっ、つぷぷぷるゅちゅっ、づぷぷぷぷゅづぷっっ！

「っはあああああぁぁぁぁぁぁああああっ――けんたろっ、さまはあぁぁっ――わたくひっ、こわれへえええぇぇぇっ――っ！」

腰打ちが強められると、脱力した麗はもう、強い力と性感をただ柔らかく受け止めるしか、できない様子。

重くて熱いペニスに、全身も意識も支配される喜びなのだろう。女体は柔らかくしなって男子の力を甘受して、少女から女へと、ペニスによって変えられてゆくのが解る。

白い肌は上気して、性感の汗を一筋流す。やや小さな乳房は愛らしく上下して、脂肪の薄いヒップはプルプルと柔振動を繰り返す。

左右の襞は綺麗で薄く、形も整い、柔粘膜を護っていた。浅いシワを見せる性粘膜は、蜜を含んでツヤツヤな濃い桃色に充血している。

小さな尿口は針穴のように控えめで、割れ目の下端には小指の先すらもキツそうな、小さな膣孔が息づいていた。

「け、けんたろぅっ――ゃあぁぁ…っ！」

舌先で軽く突いたら、七尾の全身が震えて跳ねて、腰から両脚がカクカクと痙攣。

愛撫する舌で感じるのは、薄い酸味の蜜と、粘膜の、蕩けるような性感の熱。

愛しい少年に恥処を全て晒した幼なじみは、恥ずかしさと、ちょっとの悔しさと、大きな喜びで、目を潤ませていた。

大好きな七尾が、自分のものになる。その覚悟と信頼を、寄せてくれている――。

素直な少女に、拳太郎の性欲求は限界を突破。胴着を脱いで、七尾のシャツも奪う。

全裸幼なじみの開脚媚尻を抱き上げると、自ら仰向けになって、猛る腰に跨がらせた。

「えっ――きゃぁん…っ！」

騎乗位姿勢にされた少女は、戸惑いと羞恥でアワアワする。ヒザ立ちだけの不安定な姿勢で、つい少年の胸板に両掌をつくと、下から見上げられている恰好だと解る。

熱い勃起の先端が、濡れた処女膣孔に触れて、背筋までが痺れたらしい。腰がクネりと脱力をして、上体が反れたりする。

「やっ、待っ――んんっ……やだっ、そんなにしちゃっ――ひゃあぁっ…っ！」
秘処で感じる、拳太郎の視線を追いかける。その視界には、媚孔に触れて天を突く、堅い勃起が目に留まった。
まともに見てしまった拳太郎の太ペニスに、驚愕。
「なっ――何よ、拳太郎っ――子供の頃とはっ、違ぅっ――う、嘘つきぃ…っ！」
一緒にお風呂に入っていた頃の記憶だろう。
思い出と違って、カリ部分を剥き出しにして、表面も血管がビクビクしている。
「七尾だって、胸おっきいじゃんか」
「そ、それは……そぅ、だけど……」
お互いにもう子供ではない。そんな当たり前の事実を、七尾はあらためて実感した様子だった。
幼なじみ同士のそんな間が、いい感じに緊張感をほぐした事に、拳太郎は気がつく。
「七尾、入れるぞ」
「え……あっ、待っ――」
アワアワしてるウチに、少女の腰を引き寄せながら、自らの腰を強く突き出す。
熱くてプニりと絞るような膣孔に肉棒を数センチ押し込んで、キツい絞りの行き止まりに当たった、直後。

――っっつぷんっっ！
「い痛っ――っけ、けんたろふ…っ！」
七尾の初めてが、拳太郎に捧げられた。
半分にも満たない位に埋められた硬い勃起の表面を、幼なじみの蜜と一緒に、破瓜の鮮血が流れ落ちる。
七尾と、セックス――。
そんな実感が、嬉しさになって胸に広がる。
同時に、早く抽送したい欲求にも、強く駆られる。
でも七尾を苦しめたくない本能も働いて、焦りながらも優しくリード。
「七尾。痛みが引くまで、ゆっくりな……」
「ぅ……うん…は…ああ、あぁぁぁ…っ！」
少女の腰を静かに下ろすと、最も熱くて柔らかい粘膜の奥へと、堅い熱勃起が呑み込まれてゆく。
目を閉じた七尾は、胎内が占領されてゆく感覚に、ただ素直に従うしかできない様子。
十数秒掛けて根元まで完全挿入をすると、腰が密着した幼なじみは、自分でも未知らしい、飢餓感を隠せない吐息をこぼした。
「はぁぁ……んぅ……なかまで…ぁたし、けんたろぅと…はぁぁぁ……っ！」

薄く開かれた瞼の奥は、喜びの輝きでキラキラしている。口元にも、破瓜の痛みと、それを越える女の充足感の笑みを見せていた。

「七尾の中…凄く、気持ちがいいっ！」

幼なじみの膣壁は、微細な粒と無数の襞で覆われている。勃起を拙く抱き締めて、迎え入れてくれながら、懸命に愛情を伝えようとしてくれていた。

少年の大樹をキツく抱き締め、表肌全体や性感箇所を、粒襞で刺激してくる。

熱くてトロトロなのに、鼓動に合わせてリズミカルに、強く全体を締めつけてご奉仕。

幼なじみの健気な身体に、少年の肉体はガマンの限界を超えた。

言葉と同時に、強く深くと腰打ちを開始。

「七尾っ、もうガマン無理っ、すぐするっ！」

「えっ――ちょっ、けんたっ――あぁいっ、ひぃいっ、ひぁあああああああぁ…っ！」

――っつぷちゅっ、つぷるぷっ、つぷづぷゅるっ、づぷづぷづぷづぷゅっ！

最初の数回までは自制してユックリだったけど、アっという間に加速していた。

唐突に始められた抽送に、少女の身体が翻弄される。ガッシリと腰を押さえられて、真下から連続で、強く激しくドンドンと突き上げられる。

「ひっあっやっひゃあぁっ――けんたっ――あはぅあっ――そんなにっ、ついちゃあああぁぁぁっ――おなかドンドンしちゃっ――ひちゃふからはあああぁぁぁあああっ…！」

腰の奥まで抽送されて、軽い肢体が上下動。柔らかい豊乳が楕円に跳ねて、先端の媚突も更に硬化。
痛みが完全に消えたらしく、七尾の瞼が深くシットリと閉じられている。
細い背中が官能でしなり、解いた髪がフワフワと乱れる。頬も耳も首筋も、全身が上気して恥汗を纏った。
少年の腰打ちに、緊張していた腰が導かれて馴らされてゆく。抽くも前後にしなって、激しい突き上げを柔軟に受け止めている。
脱力した巨尻は拳太郎の腰に打たれる度に、柔尻脂肪をプニプニと弾ませて、少年の掌と指を食い込ませていた。
勃起を包む膣壁は、ギリギリまで引くと、強く吸引して離れたくないと自己主張。
奥深くまで突き込むと、フワりと受け止め、もう離さないと強く熱く抱擁をする。
新たに蜜の溢れる処女粘膜は、拳太郎のペニスに隙間なく密着をして、表皮全体からカリ部分の後ろから裏側に至るまで、全てを粒襞壁で締めつけて愛撫。
肉棒の表面から芯へ、更に腰の奥深くにまで、締めつけられる快感が流れ込んできた。
突き上げる度に七尾の吐息が艶で湿り、拳太郎の性感も、射精欲求を高められてゆく。
「けっ、けんたろふすごひぃっ――っぁたひヘンになるふうううぅぅっ――っドンドンんっ――ロンロンされへっ――ぁたひっ、はずかひいいいぃぃっ…！」

頭の奥がヘンになりそうだと、濡れた目が訴えている。七尾自身、セックスが乱れるほどにも感じるなんて、想像すらできなかったのだろう。

心臓の鼓動が高まって、頂点だけが欲しいと、二人の身体が求める。

お互いに性感を高め合って、もっと感じ合っていたいのに、早く一緒に頂点へと行きたい。二人の肌の相性は、最高なのだ。

射精欲求に駆られた拳太郎が、勃起抽送の力と早さを強めた。

――っつぷづぷぢゅっ、づゅぷぬるっぷづぷづぷっづちゅづぷづぷっっ！

「っやあああああぁぁぁぁんんっ――ラメへっ、そんなにつよくっ、ひちゃはっ！」

強く早い勃起責めは、少女の奥で息づく子宮口を、ツルりと突破。更にヌルヌルの子宮壁にも、熱い亀頭で何度もパンチングを繰り返す。

胎内最奥を勃起で連打されると、少女の全身が完全脱力。

「っはひっ――ひいぃぃあああっ――っラメへっ、そんなズンズンんっ――ぁたひっ――ぁたひラメへぇぇぇぇぇぇぇぇっ――っ！」

言葉は完全に蕩けきり、恥ずかしい性感の感覚を、無意識に告白。もう少年の両掌で乳房を揉まれる恰好でないと、上体を支えらない幼なじみだ。

ペニスをキツく抱き締められる拳太郎も、リズミカルな締めつけ愛撫に、肉体の興奮が高まってゆく。

両掌で揉み上げる豊乳と、腰の重みと勃起の感触だけが全てになって、濡れた結合音と幼なじみの艶声だけで、意識が埋められてゆく。
男性器が締めつけられると、本体の熱と太さと堅さが、一段と増す。腰の奥へと力が溜められて、射精に向かって全力ダッシュ。
二人の肉体は、もう一緒の絶頂以外、何もいらなかった。
七尾に、出したい――。
そんな無意識が肉体を支配。
「けんたろっ――ひゃんひゃんひゃんひゃんんっ――ぁたひィイいぃっ――ぁたひのなかれへっ――けんたろふぅっ、すごひいいぃいいいいいいいいいぃいいいいいいいいぃ…っ！」
幼なじみの肢体が仰け反り、しかし濡れた視線は少年と混ざり合ったまま。
深い官能に乱れる少女。肉体も視界も、全てがお互いで満たされると。
もうイく――。
脳裏まで真っ白になって、そして拳太郎は、絶頂を確信。
「七尾っ！」
腰を強く引いて、そして全力で激しく、深く深く、突き込んだ。
――っっづぷゅっっ!!
「っ――っあああああああっ――っ!!」

硬い肉で奥まで突かれたと同時に、粒襞の膣壁がキュムュっと、強くキツく締まる。
「っ――はあああぁぁぁっ――っ!!」
その瞬間に、拳太郎と七尾と、そして鏡華と麗の性感は、一緒に頂点を迎えていた。
少年の目の奥で、眩い白光がカっと煌めく。
同時に、剣術少女も。
「けっ、けんたろっ――ぁたひィくふっ――あっあっひあああぁぁぁっ――っぉくズンってされへっ――けんたろふにズンってされへぇっ――イっちゃうううううううぅぅぅうううううっっ!!」
恥ずかしいイき宣言を自ら告げつつ、幼なじみが頂点に突き上げられる。浴室内に、少女たちの絶頂艶声が木霊していた。
白い肌が紅葉色に染まり、砕けた全身が背筋を反らせる。
突き出された濡れ乳房がプルルっと震え、湯の中では巨尻も官能に震えていた。
膣壁は、勃起をより強くリズミカルに抱き締めて、性感の感謝と愛情を惜しみなく伝えてくる。
左右では麗と鏡華も、小さいけど深い快感で達している。
「んんんんんんっ――っはあぁぁ…っ！」
「ぁはあああぁぁぁうっ――っはぁ、はあぁん…♥」

そして頂点に上げられて意識が蕩けた七尾は、快感に濡れる瞳に深い喜びの光を魅せながら、少年との視線を逸らす事はなかった。

素直で可愛い幼なじみの子宮の中へと、拳太郎の勃起から、粘性の高い精液が放出される。

――っっびゅるるるるるるるるるるっ、どぷびゅるるるるるるるるるるっ、びゅくくっ、びゅくっ、どぷびゅるるるるるるっ!!

口を絞った放水の如き勢いで、七尾の子宮壁が精液責めに叩かれる。胎内最奥に熱液放出を受けながら、幼なじみは女の喜びへと、完全に呑み込まれてゆく。

「あぁぁ……けんたろぅの……またぁ……わたひぃ、また…ィっちゃったぁ…けんたろぅ……らい、好きぃ…♥」

普段なら絶対に言わない、恥ずかしくて素直な告白。

十数秒という長い射精を受けながら、七尾は拳太郎に見つめられつつ、恥ずかしいけど幸せな絶頂快感を漂い続けた――。

「あ、あたし…あわわっ…えっと…つ次はっ、ぅ麗ちゃんよね…っ！」

ユルユルと頂点から降りてきた幼なじみは、理性が戻ると強烈に恥ずかしくなったらしい。噛みながら誤魔化して、力の入らない身体で少年から離れようとしたら、カクんとコ

ケたりした。
「それでは、拳太郎様……次は、私に……」
頬を染めながら、長刀少女が恥ずかしそうにオネダリ。
いまだギンギンに硬化を誇るペニスにチラと視線を寄越すと、期待と恐れで、思わず強く目を閉じたりする。
「麗はどうしたい？」
どんな体位が望みか優しく尋ねると、耳まで真っ赤にして、少年の耳元に伝えてきた。
「ぁ…ぁの……ぉ恥ずかしぃですが……その…」
更に小声で「どぅか……ぅ、ぅ…ぅしろ…から……」と、欲求を漏らす。
蚊の鳴くような声とはこの事。よほど恥ずかしいのだろう。
拳太郎は麗の気持ちをくみ取って、自ら命令口調で告げる。
「麗、お風呂のフチに両掌をついて、俺にお尻を向けて」
「は、はぃ…っ！」
少年の気持ちを理解した黒髪少女。嬉しさと欲求の混ざった瞳を濡れさせて、でも恥ずかしそうに、拳太郎に背中を向けて、湯船のフチに両掌をついた。
浴槽の中でヒザ立ちになってヒジを折ると、湯面から浮かぶ細い背中と、スレンダーなのに広いヒップがエッチに目立つ。

湯の波を受ける秘処と後孔が、恥ずかしそうに収縮をする。
「あぁ……そ、そんなに…ご覧になっては…はぁぅ…」
少年の視線が刺さったのか、麗は耳もうなじも真っ赤に染めて、自ら秘処を晒す被虐的な喜びと、姫処を視姦される羞恥に耐えていた。
突き出された媚尻の背後で、ヒザ立ち姿勢になった拳太郎が、小振りな丸尻を両掌でサワサワと撫でる。
「はひゃんっ――あぁぅん……そんな、ゃさしくふ…っ！」
触れるか触れないかのタッチで敏感な肌を何度も撫でたら、よほど深くに性感を得たらしい。
麗は首から背中までを綺麗に反らし、白いヒップをフルフルと揺らして、肌愛撫の快感に喘いでいた。
ヒクヒクとわななく肛門のすぐ下では、朱い媚溝がクチュリと開いて、もうガマンができないですと自らの粘膜を晒している。
湯とは違う媚液で濡れる熱い膣孔に、少年は背後から勃起を当てた。
長刀少女の肢体がピクンと揺れたタイミングで、力強く一気に、根元まで腰を進める。
――っつぷゅっっ！
「っんんふうぅっ――はあぁあ…っ！」

胎内を満たされた麗が、息を詰められたように、性感で脱力するように、弱々しい艶息をこぼす。
ついさっき、少年の指で小さな頂点に達したばかりの少女。勃起詰めされた小柄な女体は、それだけで追い詰められてしまったらしい。
フチを掴む両掌は小さく震え、力の抜けた身体は自分の頭すら支える事ができず、両掌に頭を乗せて長い黒髪を湯に泳がせていた。
無数の襞で覆われた麗の膣壁も、少年の堅い肉棒を呑み込まされて、恥ずかしいけど素直な気持ちで締めつけてくる。
「うく……麗の中、凄く、狭くて…っ！」
小さな全体で精一杯に抱きついてくる感じは、この少女と同じく健気で愛おしい。狭い膣筒で拙くも襞抱き愛撫をくれて、拳太郎に喜んでもらおうとリズミカルな抱擁。
「け、けんたろぅ…さまぁ……わたくしぃっ――いっぱぃ、れすぅっ――んぅっ！」
少年の肉で満たされると、下半身から背筋を抜けて、脳裏までが痺れてきたらしい。焦れったさも感じて言葉が乱れ、吐息と快感で細い背中がクネんとしなった。
ヌルヌルの襞々で締められて肉カリの裏まで刺激されると、拳太郎もジっとしてなどいられなくなる。
少女のヒップをガッシリと掴むと、子宮壁に向かって力強い突きを開始した。

最初はゆっくり。でも強い締めつけに後押しされて、すぐに早く。
――つぷっつぷぢゅっ、ぬちゅっつぷちゅっ、つぷづぷづぷちゅっ！
微細な襞を分けるような感覚に、勃起肌の各所が鋭い快感で強く痺れさせられた。
「っはぅっ――はっんっあっはっ――け、けんたろふぅぅっ、さまはあぁぁっ――っ！」
堅い勃起で連突きをすると、飢餓を覚えさせられていた肢体は、アっという間に深い官能を燃えさせられてしまう。
細い背中が脱力して震え、全身をしならせて強い腰打ちを受け止めている。
少年の力腰で波が立つと、突き上げたヒップから背中までが湯を被って、白い肌が上気して濡れて艶めく。
湯の中では、下向きになって少しだけ質量の増した美乳が、タプンフルンと小さく前後に泳いでいた。
肉詰めされる膣孔からは、新しい蜜がトプトプと溢れ出し、すぐ上の媚肛までもが、濡れ艶を纏っている。
心臓の鼓動に合わせてリズミカルに締めつけてくる、麗の膣壁。視界の中では、勃起で感じる締めつけと一緒に、小さな菊肛もキュっキュと収縮を魅せていた。
太いペニスを呑み込まされた膣壁は、更に頑張って締めつけてくる。
腰を引くと縋るように吸いついてきて、根元まで突き込むとフワリと柔らかく受け止め

て更に吸着。
蜜纏う膣壁と擦り合うペニスが、襞の愛撫で焦らされて、更に力を増す。
少年の腰と少女の美尻がぶつかって、パシャパシャと湯の飛沫を上げていた。
二人の交わりを見ている鏡華と七尾も、肌愛撫で行為に参加する。
「まあぁ〜…なんと激しい…。七尾さん、わたくしたちも…♥」
「あ、あたしは……うぅ…」
少年の背後に回ってヒザを突いて、鏡華は右側へ、七尾は左側へ。
「拳太郎殿〜、うふふ〜♥」
「ぅおっ⁉」
二人の柔らかくてスベスベな女体が、背後の左右からムニュンと密着。鍛えられた少年の背中に、鏡華の巨乳と七尾の豊乳が押しつけられる。
「け、拳太郎……その……気持ち、いい…？」
問いながら二人は両脚も絡めて、下腹部を少年の後ろ腰に押しつけて、更に両腕で身体を抱き締めてきた。
背中で受ける乳房のプニュプニュ感と、左右の腰で感じる少女の引き締まった熱い下腹部。更に、二人の両腕で抱き締められている、肌官能。
「な、なんかっ…全身がヌルヌルぷにぷにしてっ——凄くいいっ！」

女性を背後から腰突きしながら、更に抱き締められている自分。
何だか、全ての支配者にでもなったような、不思議な征服欲が高められてゆく。男の自尊心が、否応なく満たされてゆくような、強い自信と快感に繋がる女体奉仕だ。
少年の顔に興奮の笑みが浮かぶと、幼なじみもまんざらではない様子。
「き、気持ちいいんだ……そっか…」
隠せない喜びが美顔から溢れ、左ポニテの少女は更に肉体奉仕を思いつく。
拙くも懸命に肢体をくねらせて、抱き締めた男性に縋るように、身体の前面で肌愛撫。
両脚でも少年の腿を抱いて、自ら割れ目を押し充てて、腰をくねらせる。
七尾の肌ご奉仕を、鏡華も真似た。
「ゃあぁ～ん、ぁはん……鏡華も、ぁふ…気持ち、いいです～♥」
愛しい少年の鍛えられた肌に、女子たちの柔らかい官能肌が密着。
拳太郎の腰打ちに合わせて麗の肢体が震えて跳ねて、鏡華と七尾の女体が縋りついてクネられる。
全身というか、全てが女性の熱い柔らかさに包まれている感じ――。
少年の肉体も、頂点を求めて鼓動が高まってゆくと、勃起の太さと堅さと熱が、一段と増す。
無意識の肉体が突き動かされると、早く快感の頂点が欲しくなる。

襞の締めつけに放出したい本能で、腰の突き込みが力強く、激しくなった。
――っっつぷづぷづちゅぷっ、づちゅぬちゅづちゅぷづぷづぷっ！
「はひっ――ひゃんひゃんひゃんひゃんっ――けんたろっ、――さまはあぁっ――ガンガンされへっ――わたくひぃぃっ――っこはれますふうううぅぅぅぅぅっ！」
脱力した肢体の最奥、子宮壁を力強く連打されると、強すぎる快感で理性的な麗の呂律も回らない。細い指は湯船の縁を必死に掴み、弱々しく震えていた。
力の抽送を受けるヒップはタプタプと揺れて、激しく跳ねた湯を何度も浴びてキラキラと濡れる。責められる子宮の快感と飢餓感を魅せつけるように、薄いカフェオレ色の後孔もヒクヒクとわななく。
激しい抽送に対し、懸命に応じる襞々の膣壁は、更にキツく肉密着。
微細な襞をより際立たせてペニス全体の性感箇所を愛撫責めにして、焦らされるような痺れるような快感ご奉仕を施していた。
健気な女体に興奮が強められてゆき、拳太郎の鼓動も更に早まる。勃起の先から腰の奥に向かって、射精の力が溜め込まれてゆく。
格闘少年と長刀少女。二人の身体が、高まる性感と膨張してゆく飢餓感に押され、もう頂点しか、いらなくさせられていた。
耳からの音が遠退いて、肌で感じる感覚も、女体だけが全てになる。

胸と背中は、左右から縋りつく少女たちの腕が抱きついて、這い回って愛撫をくれて、ペニスと腿は三人の愛蜜でヌルヌルに濡れて女体と絡まる。

「け、けんたろぅ……はぁぁっ……！」

「ぁあん……きょうか、またぁぅ…♥」

交わる二人の性感に影響されたのか、七尾と鏡華も、また小さな絶頂へと一緒に高まってゆく。

絡まる四人の身体で、湯は盛大にパシャパシャと跳ねる。

そんな音さえ遠退くと、拳太郎の視界には、愛しい少年と視線を絡めたいと、懸命に肢体をひねってこちらを見つめる黒髪少女の姿があった。

麗、可愛い――。

そう感じたと同時に、少年の性感が限界を突破。

絶頂が来ると身体が理解する瞬間、腰を強く引いて、全力で突き込んでいた。

――っっづちゅっっ！

熱い襞を掻き分けると、肉棒の肌全体が蜜襞で擦られて、腰の奥までが甘く痺れる。

「っ――っ!!」

同時に、熱くて堅い亀頭部分で子宮壁を強打された麗は、一瞬で、これまで以上の絶頂へと飛ばされてしまった。

「はひいいいいっ――わたっ、わた、くひいいいいいいいっ――っはひっ、ぁはひいいいいいいっ――ィイきっ――けんたろっ――さまはっ――ィイき、ますふうううううううぅぅぅぅぅぅぅっ!!」

細い背筋をキツく反らせて、小柄な肢体いっぱいに絶頂を溢れさせる長刀少女。長い黒髪を湯に泳がせて全身を痙攣させて、白い肌がサァっと紅葉色に染まり上がる。

柔らかいヒップがプルルっと震え、膣壁と一緒に媚肛が収縮。

太い勃起が更に、襞々の膣壁で締めつけられる。

麗は無意識に恥ずかしい絶頂告白をくれながら、濡れた瞳を逸らさずに、満たされた美顔を少年に捧げていた。

左右から抱き締める七尾と鏡華も、一緒に絶頂。

「またイっ――ィっちゃふぅぅぅぅっ――っ!!」

告げながら、更に肢体をすり寄せてくる幼なじみ。

そして鏡華も。

「けんたろふっ――どのふぅぅぅぅっ!!」

巨乳と秘処を少年の肌に押しつけながら、絶頂の波に身を震わせていた。

三人の絶頂艶声が、浴室の中で木霊する。湿気と石けんの香りと一緒に、女体の甘い香りが更に浴室内を満たしていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!